

1.17 震度 7 の体験から(1995 年 3 月号掲載・鍵本 敦)



5 時 46 分「ドーン、ガタ、ガタ、ガタ」大きな音と激しい揺れが待機室を襲った。すぐに、全員を出勤させ、1 階へ降りた際にはすでに署の西方に 2 本の火柱を確認。さらに現場から 2 箇所、4 箇所……と増え、あっという間に管内には十数本の黒煙が視野に入ってくる。他署管内でも火災が多発しており応援隊は期待できない状況であった。

神戸消防は近年様々な市街地火災を体験してきた。近年の市場・商店街の火災や病院火災をはじめゴム工場火災などが大火の代表として対策を講じられてきた。また、防火建築物の少なかった過去には市街地大火も数多く体験してきたことも既知のことである。

長田管内で発生した十数本の火災エリアの大半は、危険物を含め火災加重の大きいケミカル産業や市場・商店街などが木造住宅の密集地区の中に混在するといった極めて延焼しやすい都市構造となっていた。また、中には病院施設も存在した。さらには、震度 7 という想定外の烈震は殆どの防火木造の建物を裸木造に変え、防火帯となるべき生活道路にはこれら建物が倒壊し全く区画のない街区をつくってしまった。その結果、一度発生した火災は、4.6 メートルの北東風により一

瞬により延焼拡大し市街地大火へと変貌していった。神戸消防が過去半世紀にわたり体験してきた種々の大火が、1月17日5時46分の直後に、それも長田管内で一斉に起こったのである。

また、これに加え、これまで想定していた集団救急や大規模災害などとはケタ外れの数の要救助者が倒壊家屋の下敷きになり救助を求めているのである。

神戸消防の全戦力を合わせても対処できないほどの同時多発火災、そして集団災害、これらに長田地区隊のみで対応せねばならないとは……中隊長という立場でありながら一瞬、頭の中が真っ白になった。まさに修羅場そのものである。

しかし、少ない部隊を有効に活用し、一人でも多くの命を助けねばならない。応援隊が来るまで、できる限りやるしかないのだ、今こそ冷静に判断しなければならないと気持ちを切り替え、次のような活動方針を立てた。

1. 可能な限り、部隊を分散させ火災現場へ1台でも消防車両が配備されるようにする。そしてできる限り市民の協力を得て活動効果を高めることが必要である。
2. 消火栓断水という厳しい現実に対しては、可能な限り防火水槽等で繋ぎ、人手が集まれば、その時点で自然水利を確保し、大量放水につなげる。
3. 要請のあった救助事案に対しては、市民の中でのリーダーになれる人物を見つけ、その者を中心に人手を集めてもらい活動を頼む。資器材は消防署にあるものにこだわらず使える物は全て活用する。
4. 現場間移動や傷病者搬送の手段としては、通行中の車両を停車させ、協力依頼する。使えるものは何でも使うという緊急避難的行動である。
5. 可能な限り、管内の火災現場の掌握に努める。特に、延焼方面の状況を重視し、延焼阻止可能な線をどこに置くべきかを考慮する。

しかし、これら方針が全てうまくいった訳ではなく、今、思えばつぎのような問題点が思い浮かぶ。

- 1.については、火災現場は当初の部隊数を遥かに上回っていたし、現場周辺にいる市民は逃げるのに精一杯、つまり皆避難者であり、中には靴も履けず、着のみ着のままの者もいる。また、大半の人は皆、避難や家財の持ち出しに必死で、協力どころではない。
- 2.については、人手の集まるスピードが火災の延焼に追い付かない。つまり、どの時間断面で切ってみても、火勢が消防力を遥かに上回っているのである。
- 3.については、人名救助に必要な資器材が全く不足しており、署にあったスコップやバール、鋸などはすぐに底をついてしまう。
- 4.については、比較的うまくいったが、説明等に時間がかかった。
- 5.については、中隊長一人でつかめる情報には限りがあり、全ての現場など到底掌握できなかった。

当日の中隊長として、自分なりに振り返ってみたが、当時、こうすれば良かったなどといった反省点は今、ほとんど何も思い浮かばない。あれが精一杯だったというのが正直な感想である。私の反省不足なのだろうか。

今、我々が神戸消防はこのヒューマンスケールを遥かに超えた「天災」と戦うべき、新たな第一歩を踏み出している。多くの貴重な人命、そして莫大な社会資本を一瞬にして無くしてしまったこの無惨な体験を決して無駄にしてはならない。21世紀の未来へ、そして日本はもとより世界へと発信できる震災対策を神戸消防の責任の基に築き上げなければならない。